

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

「感謝しない場面」の分析による「感謝」の研究  
—「物をあげる」という場面に注目して—

岸本 健太

本発表では、「人はいつ、どのように、そしてなぜ感謝をするのか」という疑問を念頭に置き、実際の会話に基づく分析の結果と考察を報告する。

分析の際には、「物をあげる」場面に注目した上で、その後「物をもらう」際に感謝が行われる事例と、感謝が行われない事例の2つを用い、「そこに至る経緯」に注目しながら、それらの事例を分析した。その結果、感謝が行われる事例では、単純な物の授受が行われていたのに対し、感謝が行われない事例では、物を渡すという行為と同時に、評価を求める行為が行われていることが分かった。

こうした分析の結果を踏まえ、本発表の結論として、先に述べた疑問の一部である「いつ感謝をするのか」について、隣接ペアの概念を用いた考察を行うとともに、感謝の研究における「場面と経緯の分析」の重要性を示していく。

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

日本の英語教育政策についての専門家の言説  
—ポッドキャスト番組の談話から—

泉谷 律子

本発表の目的は、インターネットのメディア上で英語教育の専門家が英語教育を語る際に、何を前景化させ、何を後景化させてメディア・メッセージ上の論理を構築していくか、そしてそこにはどのようなイデオロギーが潜んでいるかということを検討することである。そのため、個人が制作したポッドキャストの無料バイリンガル会話番組「バイリンガルニュース」の特定の談話を分析する。リサーチ・クエスチョンは、1) インターネットメディアの談話の中で、どのように英語教育改革の正当性は構築されるのか、2)このような談話は一般に流布している素朴信念を強化するのか、である。書き起こした談話を詳細に分析した結果、メディアにおける専門家と一般の人々と談話の中で構築される英語教育政策の正当性は、リスナーによって吟味されることがなくそのまま現実となって積み重なり、政策の後押しとなっていく可能性があるということを示した。

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

話題の終結と開始のための相互行為  
—マルチモダリティーの観点からの分析—

大谷 麻美

本稿は、会話中の「境界づけられたトピック推移」(串田, 1997)に焦点をあて、その話題終結部分で会話参加者達がどのように話題を終結させて新たな話題を開始させるのかについて、特に視線や頭の動きなどのマルチモダリティーの側面に着目した相互行為のあり様を記述した。データには、日本人男性の多人数会話を用いた。結果としては、円滑な話題の終結のために、会話参加者達の間で視線の回避とうなずきが多用されている事が確認できた。具体的には、先の話し手から向けられた視線を他の参加者が回避することで、先行話題について話す次の話者がいないことを示して話題の終結を暗示していた。さらにそれに加え、聞き手は視線を避けながらも無言のうなずきを繰り返し、時にそのうなずきが参加者全員の間で同調するよう広がることで相互に話題終結の了解を確認し合った後に、次の新話題への移行を行っていることが明らかとなった。

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

感情を表す「さ名詞」と「み名詞」について

加藤 恵梨

本研究の目的は、「かなしみ」「かなしさ」, 「くるしみ」「くるしさ」, 「たのしみ」「たのしさ」, 「おもしろみ」「おもしろさ」を分析対象とし、感情を表す名詞において、接尾辞「-さ」がつく「さ名詞」と接尾辞「-み」がつく「み名詞」にどのような違いがあるのかについて明らかにすることである。分析の結果、「さ名詞」はある事物によって生じる感情の程度を表し、それらは一般性をもつとすることができる。それに対して「み名詞」は個人的な感情を表し、人々と共有することが難しい。また、それらの感情は奥深く、具体的に表現するのが難しいものであるとすることができる。さらに、近年Twitterなどで従来使われてこなかった「さびしみ」「つらみ」といった「み名詞」が多用されている。そのような新しい「み名詞」も個人的な感情を表しており、それらが表す意味は従来の「み名詞」と大きく異なることが分かった。

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

国語辞典の意味記述と社会状況の変化  
— 「聾者」とその関連語の場合 —

岡田 祥平, 入山 満恵子, 中井 好男

「手話」が「言語」であるということを、広く日本社会に知らせようとする最初の試みは、「ろう者とは、日本手話という、日本語とは異なる言語を話す、言語的少数者である」という一節から始まる市田・木村(1995)だと思われる。この点に関連し、亀井(2009)や都染(2011)は、『広辞苑』や各種国語辞典(以下、辞典)における「手話」の意味記述の変遷をまとめているが、各種辞典における「聾者」の意味記述の変遷に着目した研究は見当たらない。

そこで、各種辞典における「聾者」「聾」「つんぼ」という「聾者」関連語彙3語の意味記述の変遷について素描を試みた。結果、少なくとも辞典においては、①1970年代までは「つんぼ」という語を中心に語釈が与えられていた、②1980年代に入り「つんぼ」という語釈を避ける傾向が認められる、③市田・木村(1995)が明示した「ろう者」の定義を反映した辞典は現在においてもほとんど存在しない、といったことが分かった。

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

断り場面における電子メールの書き方の相違と言語転移

馬 云霏

本発表は、中国語を母語とする日本語学習者、日本語学習歴も滞日経験もない中国語母語話者、また日本語母語話者を対象に、断り場面を想定した電子メールにおける言語転移の実態とその原因を明らかにするものである。また、学習者の母語による影響と目標言語による影響、及び中間言語語用論の特徴はどのようなものであるかについても、第二言語習得の観点から考察し、その傾向を明らかにする。中国語母語・日本語学習者、中国語母語話者、日本語母語話者各15名に、同じ親しい関係である上下関係が異なる二つの断り場面を想定したメールの文章を、中国語母語・日本語学習者は日本語と中国語、中国語母語話者を中国語、日本語母語話者は日本語で作成してもらった。さらに、中国語母語・日本語学習者15名に対してインタビューを行い、分析を行った。本発表は、その結果及び日本語教育、また中間言語語用論研究の示唆となるものを提示したいと考える。

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

国際法上の言語権概念の日本国内法における受容について

杉本 篤史

言語権概念は社会言語学領域ではすでに十分な合意があるものの、憲法学の領域ではいまだ馴染みのない概念である。本発表はこのような日本における言語権の理解状況をふまえて、法学の見地から国際法上の言語権概念をいかにして日本国内法において受容せしめるか、またその条件は何かについて検討する。まず国際法上の言語権概念の発展過程を追い、障害者権利条約の考え方による言語権概念の問い直し状況を検討する。ついで、日本国内法への言語権の受容を妨げている日本国憲法の問題について考察する。憲法14条（平等条項）、96条（条約の国内法的直接効力）、13条その他（公共の福祉）などにより、国際人権条約の内容を国内法に受容する政府の法的義務は事実上の政治的義務に過ぎなくなっている。以上をふまえて「現在進行形で問い直されつつある国際法上の言語権概念」を日本国内法へ受容するには「言語権基本法」の制定が必要であることを提言したい。

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

現代朝鮮語の当為表現'-ya toyta'が使用される状況の分類  
—聞き手が行為者の場合を中心に—

平 香織

本発表では、現代朝鮮語の-ya toytaを取り上げ、聞き手が行為者となる場合にどのような状況で使用されるのかを行為の実現と(不)利益との関係から考察した。5つの状況のうち、(a)行為の実現が非行為者の利益になると考えた場合、(b)事態の実現が聞き手にとって不利益になる場合、(c)行為の実現と(不)利益が関連ない場合という3つの状況において、朝鮮語に特徴的な例が見られた。

(a),(b)では、依頼や命令を表す形式の使用が可能であるが、この状況で-ya toytaが使用されるのは、話し手と聞き手が当該事態に関わる情報を共有しているためであると説明した。(c)では、行為の強要や牽制、意図的に気分を害させる場面での使用が見られ、親しさや相手の行為への非難、話し手の主張の正当性を表すことを指摘した。



<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

連濁における使用領域差と造語表象因

浅井 淳, 大野 和敏

日本語の連濁現象に関しては、統語論、意味論、音韻論、語彙層などの観点から、多くの調査・分析・論考がなされてきた。今回、合成語名詞の音形を、普通名詞、季語、色名、地名、姓・名、建造物名、商品名、動植物種名などの使用領域別に収集して、連濁生起率を集計した。その結果、後部要素となる形態素は、使用領域差があまり無い3タイプと使用領域による差がかなりある3タイプに分かれた。特定領域の命名時に、原意保持や連想表象などの造語意図が含まれることがあり、心理面の寄与や社会的役割の機能が推測された。現代でも生産的な連濁現象には、社会における実使用領域上の差異を踏まえると、これまで指摘されてきたよりも多くの要因が関わっていると考えられる。

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

合同コンパ場面における日本語母語話者の話題導入と気遣い

宿利 由希子

本研究は、話し手の「気遣い」を会話参加者が理解・評価する際に注目する要素を見いだすことを目的とする。そのため、談話における話題導入に注目し、日本語母語話者による合同コンパの会話を談話分析の手法で観察した。その結果、(1)最年少の男性による話題導入数が他の参加者の話題導入数を大きく上回り、その約半数が聞き手に関する話題導入であること、(2)自己に関する話題導入は男女1名ずつによるものが同数で最も多いことがわかった。他の参加者は、(1)の男性を「営業さん」、(2)の女性を「ツッコミ」と呼んでおり、この2人の話題導入を含む言動を、「営業さん」「ツッコミ」という話し手のキャラから理解・評価しようとしていることが観察された。このことから、参加者は話し手の気遣いを、年齢や性別、話者間の人間関係だけでなく、話し手のキャラから理解・評価する可能性が示唆された。

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

謝罪行為にみる日・モンゴル規範意識の相違  
—元横綱日馬富士の引退記者会見の分析を通して—

オユナー ノミン

2017年11月29日、モンゴル出身の第70代横綱日馬富士が記者会見を開き引退を表明した。同国出身後輩力士に対する暴行・傷害事件で世間に注目され、世論が過熱した上での引退表明であった。しかし、その記者会見で、被害者への直接かつ明確な謝罪はなく、その点をめぐって日本のネット上ではさらに視聴者から批判の声が殺到した。

本発表ではこの記者会見について、視聴者と日馬富士側がそれぞれ異なる期待と意味づけを持っているのではないのかとの仮定から、記者会見の談話、ネットニュースにおける日本人とモンゴル人視聴者のコメントなどを手掛かりに、批判的談話分析（CDA）の視点から詳細な談話分析を行った。その結果、日本・モンゴル人視聴者をそのように解釈せしめた背景に、謝罪に関して、とりわけ明確な形式表現を重んじる日本の文化的規範意識と、謝罪を「有標」の行動と捉える遊牧民の文化に由来するモンゴルの文化的規範が存在していたことがわかった。

<<ポスター発表>> (9月23日 10:00-11:15)

【L棟2階ホール, L204】

インタビュー形式の自由会話における終助詞「ね」の使用状況  
— 韓国人日本語学習者を中心に —

朴美貞

本研究の目的は、国立国語研究所が公開している「多言語母語の日本語学習者横断コーパス「略称：I-JAS」）を使い、インタビュー形式の自由会話における韓国人日本語学習者の終助詞「ね」の使用状況を分析することである。本研究では、話題となる情報がどこにあるかによって、その「ね」の使用を「必須」と「任意」に分類している、神尾（1990, 2002）の「情報のなわ張り理論」の①必須の「ね」、②任意の「ね」、③任意、疑問の「ね」、④任意、強調の「ね」の4つの枠組みを用いる。

韓国人日本語学習者の「ね」の使用を分析した結果、①必須の「ね」と、②任意の「ね」の「そうですね」の使用が少ないことがわかった。特に、韓国人日本語学習者は「そうですね」の代わりに「はい」を使っているため、母語話者が「そうですね」の後に追加の情報を提供する「そうですね+情報提供」のパターンはあまり観察できなかった。

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

偶然の出会いにみられる対面会話開始部の様相

岡村 佳奈

本発表では、日本語母語話者が聞き手になる用意のない、偶然に出会った場面でどのように会話を開始するのか、その様相を考察することを目的とする。

このような研究目的を達成するため、同性および同年齢の日本語母語話者同士に、(1)17時頃、偶然、久しぶりに出会った場面、(2)20時頃、毎日のように会っている相手と偶然に出会った場面、の二つの場面でどのように会話を開始するのかロールプレイを行ってもらい、文字化を行った。

その結果、順番が前後することがあるものの、基本的には「認識—認識」→「挨拶—挨拶」→「挨拶表現—応答」という3つの隣接ペアから構成されていること、ロールプレイ調査で出会いの時刻を夕方～夜と提示したにもかかわらず、「こんにちは」「こんばんは」という挨拶はほとんどみられなかったことなどを明らかにすることができた。

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

中国語における日源新詞の受容  
—日源新詞の判別とその受容について—

張 曉娜

“萌”（萌え）等のように、1978年の中国の「改革開放」政策が実施されて以来、中国語に取り入れられた日本語由来の外来語は「日源新詞」と呼ばれている。本発表は日源新詞の定義と判別基準を明確にした上で、新詞辞書、先行研究そしてメディアから集めた語について、受容パターンと意味の2つのレベルに見られる受容の特徴について報告する。

その結果、得られた296語の日源新詞の受容パターンに関する特徴は、①受容パターンが増えたが、借形語が依然として一番多いこと、②音訳語が以前より徐々に増えていること、③日本語由来の形態素の生産力が高いことがわかった。意味レベルにおいては、①「暴走」を例に日源新詞の受容状況を考察した結果、日本語が中国語に輸入される際には、意味する範囲の拡大/縮小、語の評価的含意の極性の変化、意味の派生、および意味の転換等の変容が観察されること、②漢字が語彙の意味理解へ影響をもたらすことがわかった。

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

日本語学習者の発話における補助動詞「～てしまう」の使用特徴  
—談話の構造を中心に—

簡 卉雯

本発表は日本語補助動詞「～てしまう」の談話の構造に注目し、日本語学習者発話コーパスを用い、日本語母語話者との相違を比較しながら使用特徴を検討することを目的とする。分析した結果、「完結」と「遺憾」を表わす談話において、日本語母語話者では「原因・理由－結果」と「条件－帰結・望ましくない結果」の構造で、日本語学習者では「事態や事情の説明－結論」と「条件－帰結・望ましくない結果」の構造で発話が連なっている場合が多く観察された。

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

相互行為の資源としての異文化  
—日本人学生と留学生の話し合いにおける成員カテゴリー化の実践を中心に—

森本 郁代

本研究の目的は、日本人学生と中国、および韓国出身の留学生3名による話し合いにおいて「日本／日本人」といった参加者の出身国を用いた表現が使われる場面を対象とし、「異文化」がどのように有意義（relevant）になっているのかを、成員カテゴリー化（Sacks,1972）の実践に焦点を当てて明らかにすることである。分析の結果、こうした表現が、意見の主張、疑問の提示、相手に対する反論などの行為を遂行したり、自らの行為の根拠や正当性を主張するための手段の一つとして用いられていた。このことは、異文化が、相互行為を達成するための資源として利用されていたことを示している。また、「日本人／中国人／韓国人」というカテゴリー化は、そうした文化的カテゴリーを含む発話がどのような行為を遂行し、またそれに対して受け手がどのように応答するかという、行為の連鎖の中で達成される（もしくは達成されない）ことが明らかになった。



<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

日本の朝鮮学校児童・生徒たちの発話にみられるコード・スイッチングについて

李 在鎬

本発表では、朝鮮学校の児童・生徒たちの発話にみられる日本語と朝鮮語のコード・スイッチングについて取り上げる。なお、ここでいうコード・スイッチングとは、2つ以上の言語(変種)を使う話者の間で行われる言語(変種)の切り替えのことを指す。

バイリンガルの言語使用にみられるコード・スイッチングについては、これまで様々な観点からたくさんの方が研究がなされてきているが、今回は切り替えが起こったデータを統語論的観点から分析を行い、その結果を報告する。結果において、どのような特徴がみられるのか、先行研究との類似点や相違点を中心に議論していく。

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

日本とインドネシアにおける禁止表現比較  
—金沢市とバンドン市の公的表示看板を例に—

Muthi Afifah

言語景観に関する研究のほとんどは、「多言語表示」という観点からの考察に留まり、看板がその目的とする機能とその表現形式との関係を考察する研究がほとんど見られない。そこで、このような看板機能と表現との関係を調べるために、本研究では言語景観の中でも頻繁に目にする禁止看板に焦点を当て、その禁止機能とその表現との関係を分析することにする。禁止看板には様々な表現のバリエーションが認められ、どのような場面で、どのような表現が使われる傾向にあるのだろうか。両者の関係には言語や文化による差異があるのだろうか。このような問題設定により、本研究の目的は、日本の金沢市とインドネシアのバンドン市で見られる対応する禁止看板のデータを収集し、両社会の対応する場面に設置されている禁止表現の類似点と相違点を明らかにすることにある。

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

「断り」談話における視線行動の分析  
—日本語母語話者とスンダ語母語話者の比較—

Novia Hayati

日常的なコミュニケーションでは非言語行動も重要な情報伝達手段である。その重要性の認識の高まりから、近年の談話研究では、非言語行動を含むマルチモーダルな観点から言語行動を分析する試みが注目されるようになってきている。そのような非言語行動の一つに視線がある。視線の動きは、会話参与者間の対人意識とかかわりがある。では、「断り」という否定的態度の表明でもある言語行動では、どのような視線行動が特徴的であろうか。その視線行動には言語や文化による違いはあるのだろうか。あるとすれば、どのような違いだろうか。本研究の目的は、断り場面において、日本語母語話者とインドネシア人スンダ語母語話者が断る際、それぞれどのような視線行動が特徴として見られるのか、また、それは「断り」行為のどの場面とどのように関連しているのかを、両言語を対比することにより明らかにすることにある。

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

依頼・誘いにおいて断りが発生する際の発話戦略及び話者の態度  
—日本語母語話者のロールプレイとフォローアップ・インタビューの質的分析を通して—

滕越

フェイス侵害行為に関する先行研究では、DCTやクローズ・エンドのロールプレイを通して、異文化間で戦略の比較を行うことが主流である。本研究では、オープン・エンドのロールプレイと、フォローアップ・インタビューを通して、ネガティブ・フェイスを侵害する依頼と誘いの言語行為において、断りという結果が発生するときとしないときの、発話戦略及び話者の態度の違いを分析した。その結果、発話戦略に関しては、断りが発生した会話では、共通基盤を示す、負担を最小化する、相互性を主張するなどが用いられていたが、これらの戦略は、断りが発生しなかった会話でも用いられていた。断り手の言語態度を分析すると、断りに至るまでに、「依頼への協力的態度の相手の発話や場面要因による弱化」、「誘いへの否定的態度の相手の発話や話し方による強化」という特徴的な態度変容が発見された。

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

ローカル（出身地）からローカル（居住地）へ  
—在米日本人の「県民」アイデンティティ—

木場 安莉沙

本研究は在米日本人へのインタビューの質的分析から、出身地に基づくローカル・アイデンティティ（山田 2011など）がいかに米国での語り手の生活や自己の位置づけに関与しているかを示すものである。在米日本人のアイデンティティに関する先行研究では、「日本人」としてのアイデンティティ分析には蓄積が見られる一方、「〇〇県民」「〇〇出身の日本人」といったようなローカル・アイデンティティについては詳察されていない。本発表では関西出身の3名の在米日本人のインタビューデータを取り上げる。ローカル・アイデンティティは語り手の自己とホスト社会の関係性を取り巻く／仲介する形でナラティブに織り込まれ、ホスト社会での生活を困難にしたり容易にするものとしてある時は否定的に語られ、ある時は希求される。在外日本人のアイデンティティ構築を考察する上でのローカル・アイデンティティの機能や、その重要性を明らかにしたい。

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

Brexit騒動後の日本人移民の新たなポジショニング  
—EU離脱派の親戚を通してみるイデオロギーの中で—

秦 かおり

本稿は、Brexitの是非を問う国民投票とその後の多数の分析報道によって顕在化した移民排斥の動きの中で、自分の夫の親戚ですら移民排除を象徴する「EU離脱」に投票したと語る日本人移民たちが、どのようにその事態を受け止め、新しい英国の社会秩序についてインタビューの場で語るのかを、談話分析、マルチモーダル分析の観点から解明することを目的とするものである。本稿では、ある1例の分析を行った。その結果、語りは3段階に分かれており、第1の段階では個人の語りを行い、第2の段階ではそれを強化するような「友人の話」を用い、第3段階において一般化を行っていることがわかった。また第1の段階においては、相互行為的でターン交替の激しいナラティブ、Character Viewpoint、第2段階では他者の声を引用し、Observer Viewpoint、型通りのナラティブが用いられ、第3段階では共鳴が用いられて一般化とポジショニングが図られていることがわかった。

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

方言多用地域における理解困難点の整理と, その理解促進を目指した聴解教材の開発

吉里 さち子, 馬場 良二, 島本 智美, 和田 礼子, 大庭 理恵子, 田川 恭識, 大山 浩美, 嵐 洋子

本研究チームは, 熊本県熊本市を中心とした方言多用地域において, 地域共通語の理解に困難を抱える外国人を対象としたスマートフォンのアプリケーション教材を開発し, 外国人に寄り添う学習支援モデルの確立を目指している. 標準語だけでなく, 地域共通語でのコミュニケーションにおいても, 聞き取る力を醸成することは地域社会での多文化共生社会実現のための必須要素であると考え, 聴解教材の開発に着手した.

聴解教材は, 外国人にとって聞き取りが困難であると考えられる音声, 待遇表現, 文法, 語彙をとりあげた. 問題の作成にあたり, まず, 日本人配偶者として生活している外国人女性が母, 妻, 嫁として, 家族以外の人間から地域共通語で話しかけられたという場面を想定した. 将来的には, 問題の会話場面を増やししながら, 学習者が主体的に練習したい要素や表現, 場面を選択するモジュール型の聴解問題アプリケーションとして提供することを目指している.

<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

「文系学部廃止論争」とはなんだったのか？

—批判的談話研究を用いた分析—

青山 俊之

本研究は、2015年6月に文部科学省から国立大学法人に対する『国立大学法人等の組織及び業務全般の見直しについて（通知）』（以下、『通知』）をきっかけになされた議論を指す「文系学部廃止論争」を取り上げる。特に、3つのコミュニケーション出来事の連鎖を対象に、文部科学省と日本学術会議におけるテキストの分析を行った。研究手法としては、批判的談話研究の中でもフェアクラブの弁証法的アプローチを用いる。分析の結果、文部科学省は行為としてテキストに表象される<行政文書ジャンル>および<管理者スタイル>によって、新自由主義ディスコースによる正当化ストラテジーを行使していた。一方、日本学術会議は「管理者」に対し、研究者集団の代表として<抗議声明ジャンル>および<代表者スタイル>を表象することによって、「管理者」との対話を構築していた。本研究では、文部科学省と日本学術会議における対話性の違いが特に浮き彫りになった。



<<ポスター発表>> (9月23日 11:15-12:30)

【L棟2階ホール, L204】

「収録するという活動」と「収録対象活動」の関係  
—収録終了の際に打たれるカチンコに注目して—

居關 友里子

人々の言語使用や身体的振る舞いについて明らかにするために、近年、日常において人々が様々な活動に従事する場面が盛んに音声・映像データに収められている。本研究は当該データ中で繰り広げられている「収録対象となっている活動」と「データを収録するという活動」この二つの活動が同時に生じているという観点から収録データ内で生じている活動を捉え直すことを試みた。「副次的関与」が期待される活動として存在している収録活動は、「主要関与」を担っている対象活動に対し後景化しているものの、収録終了の際には前景化せざるを得ない場合がある。収録終了のタイミングを操作できる場合は対象活動の構造に影響の少ないやり方でカチンコを打ったり、この操作が不可能な場合も一旦は収録活動に合わせた後、特段の手続きなしに対象活動に戻るなど、二つの活動の衝突を最小化し対象活動の構造を維持することに志向した振る舞いが観察された。